

「血」をめぐる連想の連鎖 - フロイト『日常生活の精神病理学』第二章を読む

著者	斧谷 彌守一
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	5
ページ	49-66
発行年	2004-02-20
URL	http://doi.org/10.14990/00002506

「血」をめぐる連想の連鎖

フロイト 『日常生活の精神病理学』

第二章を読む

斧谷 彌守

フロイト 『日常生活の精神病理学』 *Zur Psychopathologie des Alltagslebens* (初出「精神医学と神経学のための月刊誌」一九〇一年、初版一九〇四年)⁽¹⁾ 第一〇版一九二四年 [Fischer Taschenbuch 版を含む現行版はこの第一〇版に拠る]⁽²⁾ には四種の邦訳が存在する。

大槻憲二訳 『日常生活の精神分析』(春陽堂、一九三〇年)
丸井清康訳 『日常生活に於ける精神病理』(アルス書房、一九三〇年、岩波文庫版、一九四一年)
浜川祥枝訳 『生活心理の錯誤』(日本教文社、一九五八年改訂版、一九七〇年)
池見西次郎・高橋義孝訳 『日常生活の精神病理学』(人文書院、一九七〇年)

の四種である。

ここで取り上げる第二章は、血にまつわる極めて生々しい話なのだが、これら四種の邦訳においては、「トレント」のシモ

ン (Simon von Trient) のエピソードが正確に把握されないままに「Blutbeschuldigung」という語が誤訳され、その結果、この第二章の生々しさの一半が殺がれてしまっている。本稿は、「トレントのシモン」のエピソードをも含めて、何重にも血のイメージのまつわりついた第二章の生々しさを十全に汲み取るうとする試みである。

一、ラテン語の単語の度忘れ

まず、「外国語の単語の度忘れ」と題された第二章を概観しておこう(以下、第二章からの引用は一九〇四年の初版に拠る。但し、原文の隔字体による強調はイタリックに変更、和訳では傍点による強調で表す)。

フロイトが『日常生活の精神病理学』の執筆を本格的に開始した一九〇〇年の前年、一八九九年の夏、フロイトは旅行中に、大学を出たインテリのユダヤ青年と再会する。青年はフロイトに向かって、ユダヤ人の未来が暗いことを慨嘆する。青年は自分たちから人生のチャンスが奪われつつあることについて熱弁をふるった後、ウエルギリウスの『アイネーイス』から、アイネーイスに裏切られたカルタゴの女王ディドーがアイネーイスへの復讐を誓う言葉を引用しようとする。

Exoriar(e) ex nostris ossibus ultor! (我々の [nostris] 遺骸 [ossibus] から [ex] 復讐者が [ultor] 現れ出でますように [Exoriar(e)] —)

「この有名な引用句を口に出してみて、青年は、自分の引用に何かが欠けていることに気づく。」

青年に促されて、フロイトは正しい引用を教える

Exoriat(e) aliquis nostris ex ossibus ultor(我々の[nostris] 遺骸[ossibus] から[ex] 誰か[aliquis] 復讐者が[ultor] 現れ出でます) [Exoriat(e)] (→)

欠けていたのは、「誰か[aliquis]、という、ありきたりの不定代名詞だった(「 nostris ex ossibus」の箇所の語順も違っていたが、文法的には問題はない)。青年は、最も基本的な不定代名詞「誰か[aliquis]」(ドイツ語では「jemand」、英語では「someone」に当たる)が思い出せなかったことを訝る。

青年に請われて、「誰か[aliquis]、というラテン語の単語をなぜ度忘れしたのかの分析が始まる。フロイトは青年に、度忘れした単語「aliquis」から自由連想をしてもらうことにする。以下、長くなるが、分析が完了するまでの二人の応答を、フロイトの原文通り引用する(引用符のない部分はフロイトの会話部分である)

ただ、あなたにお願いしたいことがあります。あなたが度忘れした単語にそれとなく注意を向けた時に思いついたことをすべて正直に、何の詮索も加えずに、私におっしゃって下さいますか？」

「分かりました。先ずおかしなことを思いつきましたね

この単語を a と liquis という二つの部分に分解するということですか？」

それはどういふことなのでしょう？ 「分かりません。」

更に何を思いつきますか？ 「更に」つづきます

Reliquien (聖遺物) Liquidation (液状化) Flüssigkeit (液体) Fluid (液体の)。これでどう何か分かりますか？」

いいえ、まだまだです。でも、続けて下さい。

「思い出すのは、と彼は嘲笑を浮かべつつ続けた 「トレントのシモン」のことです。その聖遺物を二年前にトレントの教会で見たことがあるのです。思い出すのは、ちょうど今またしてもユダヤ人に対して唱えられている誹謗中傷 「ユダヤ人がキリスト教徒を血祭りに上げるといふ」流血の廉での誹謗中傷 (Blutbeschuldigung) のことであり、また、クラインパウエル (Kleinpaul) の著作のことです。クラインパウエルは、このようなキリスト教徒の犠牲と称されるものはすべて救世主の顕現、いわば救世主の新しいあり方であると見ています。」

その連想は、あなたがラテン語の単語を度忘れする前に私たちが話していた話題と関係がなくてはいいですね。

「その通りですね、更に思い出すのは、あるイタリヤの新聞に載った記事のことです。その記事を最近読んだのです。その記事には、聖アウグスティヌスが女性について言っていること、のような表題がついていたと思います。これどうなりますか？」

もっと続けて下さい。

「今度思いついたのは、私たちの話題とは関係のないことが確実にはつきりとしている事柄です。」

「どうか一切の詮索は控えて下さい。」

「分かりました。立派なお年寄りのことを思い出したので、先週、旅行中にお会いした方です。本当の変わり者 (Original) で、大型の猛禽のような姿の方です。もしお知りになりたければ、その方の名前はベーネディクト (Benedikt) です。」

「少なくとも、聖人や神父たちの名前が並んだことにはなりませんね。聖シモン、聖アウグスティヌス、聖ベネディクトゥス (Benediktus) というわけですよ。オリギネス (Origines) という名前の神父もいたと思つんですが、おまけに、今挙がつた名前の内の三つは、クラインパウエルという名前の中のパウエルと同じように、どれも洗礼名ですね。」

「ああ、聖ヤヌアリウスと彼の血の奇蹟のことを思い出しました。まるで自動的に続いていくようですね。」

「ちょっと待って下さい。聖ヤヌアリウスと聖アウグスティヌスはどちらも暦と関係がありませんね。血の奇蹟がどんなことだったのか、思い出せないのですか？」

「ご存知だと思いますよ。ナポリの教会で、ガラス瓶の中に聖ヤヌアリウスの血が保存されています。この血が特定の祝祭日に奇蹟によってまた液状 (flüssig) になるのです。民衆はこの奇蹟のことをとても大切にしている、その奇蹟の起きるのが遅れるとパニックに陥るんです。実際、昔フランス軍に占領されていた頃、そういうことがあったのです。する

と司令官が。あるいは、それは勘違いで、ガリバルディだったのかも知れませんが。神父を脇へ呼び、戸外に配置された兵士たちを非常に露骨な身振りで指し示しながら、その神父に分からせようとした。奇蹟がすぐさま起きることを自分は希望する (hoffe) と、ね。すると、実際に、奇蹟は起きたのでした……」

それで、その続きは？ なぜ黙ってらっしゃるんですか？

「もちろん今思いついたことがあるんですが……でも、お話しするにはあまりにも個人的な事柄です。それに、ここまでの話題とは何の関連性もないし、お話しする必要もないと思つんですが。」

関連性については私が考えて差し上げます。もちろん、あなたが不快にお感じになることを話していただくように無理強いすることはできません。でも、その時には、あなたがどのような道筋を辿って *aliquis* (誰か) という単語を度忘れなさったのかを、私から聞くことなさらないで下さい。」

「そうなんですか？ そうお思いなんですか？ そういうことなら、さつき突然ある女性のことを思い出したんです。その女性からは、私とその女性のどちらにとっても非常に不快なことになりかねない知らせを受け取ることになるかも知れないんです。」

彼女の月経が止まってしまったということですよ？

「どうして当てることができたんですか？」

「ここまで来ればもう難しいことはありません。準備のための材料を十分にいただいたんですから。思い出して下さい

曆の聖人たち、特定の日に血が液状になること、予期された出来事が起きない時のパニック、奇蹟は起きなければならぬ、さもなければ…という明白な脅し、と続きました。あなたは結局、聖ヤヌアリウスの奇蹟を使って、その女性の月経のことを見事に暗示なさったんですね。

「自分で意識しないままに、ということですね。本当にそう思っていてびっくりするんでしょうか。この心配事のために私が *aliquis* (誰か) という単語を思い出すことができなかったんです。」

疑いの余地はないでしょうね。どっか思い出して下さい
a) *liquis* という二つの部分に分解なされた「*Reliquien* (聖遺物)」、*Liquidation* (液化化)」、*Flüssigkeit* (液体) という連想のこと。更に、あなたが聖遺物から思いつかれた、子どもの時に犠牲にされた聖シモンと関連づけてもいいのですがね…」

「もうこの辺でやめて下さい。私が本当に一連の連想をしたとしても、その連想をどうかまじめなものとは受け取らないで下さい。その代わりに白状しますが、その女性はイタリヤ人で、いっしょにナポリを訪れたことがあるのです。でも、こんなことはすべて偶然じゃありませんか?」

偶然を仮定することによってこのようなすべての連関を解明することができるかどうかは、あなたご自身の判断にお任せするしかありません。ただ、申し上げておきたいのは、あなたが分析しようとなさるどんな類似のケースも、同様に奇妙な《偶然》に行き着くだろう、ということなのです。

二、血の犠牲

一人のユダヤ青年がフロイトに対して、反ユダヤ主義の高まりに対して不満をぶちまける。当時、ヨーロッパでは、一八九四年のドレフュス事件に象徴されるように反ユダヤ主義が高まっていたが、オーストリアでも一八九七年以来、反ユダヤ主義のキリスト教社会主義者カール・ルエガー *Karl Rieger* がウィーン市長を務め、古き良き自由主義に影が差していた。そのような時代の雰囲気には青年は復讐の気持ちを抱いていたのである(フロイト自身も、エミール・ゾラ等のドレフュス擁護の活動に関心を抱き、ルエガーの動向を注視していた)。そこで青年は、ウエルギリウス『アイネーイス』からカルタゴの女王ティエードの復讐の誓いを引用しようとして、「*aliquis* (誰か)」というラテン語を度忘れしてしまっただけで、なぜこの度忘れは生じたのか、というところからこの分析は始まる。

フロイトが既に分析の王道と認識していた自由連想によって、分析は進められる

「分かりました。先ずおかしなことを思いつきましたねこの単語を a) *liquis* という二つの部分に分解するということですか?」

それはどっぴりうことなのでしょう? 「分かりません。」

更に何を思いつきますか? 「更にこう続きます」

Reliquien (聖遺物)、*Liquidation* (液化化)」、*Flüssigkeit* (液体)」、*Fluid* (液体の)「…」]

a-liquis と同じ分割で Reliquien (聖遺物) Liquidation (液化) Flüssigkeit (液体) Fluid (液体の) という連想のつながりは明白である。下線を施した liqui の同音性 (シニフィアン) を通じて、ラテン語の aliquis がドイツ語の Liquidation (液化) という「液体」の語義へとつながり、更に Liquidation (液化) から同義性 (シニフィエ) を通じて他のドイツ語 Flüssigkeit (液体) Fluid (液体の) へとつながっていくのである。

この辺りの連想のつながりは aliquis を起点にして「液体」という語義をめぐって起きているが aliquis の直後に連想されたドイツ語 Reliquien (聖遺物) は、単に同音性で次の Liquidation (液化) を喚び起す「液体」という語義に辿り着くための通過点にしか過ぎないのだからか (「Reliquien (聖遺物)」という語は「液体」性を伴っていないように思える)。青年が思い浮かべた次の一連の連想 トレントのシモンの聖遺物 Blutbeschuldigung クラインパウルの連想の連鎖が単にそれではないことを証することになるだろう。その箇所の検討に入る前に、既邦訳における「Blutbeschuldigung」の訳し方を列挙しておきたい。

大槻憲二訳「私はユダヤ人に對して再び加へられた迫害のこゝろを思ひます」

丸井清康訳「私は今も相變らず猶太人に對して提起される「血の求刑」(Blutbeschuldigung) (譯者註、厳しい非難) [...]」

の事を考へます。」

浜川祥枝訳「[...]「ちよつといま、又してもわれわれユダヤ人に對してあがっているけがれた人種だ」という非難のこと[...]」でよ。」

池見酉次郎・高橋義孝訳「[...]「かく、最近またしても起こってきた、われわれユダヤ人は汚れた血を持った民族である」という非難のこと[...]」が浮かんできます。」

傍点を付した部分が直接「Blutbeschuldigung」の訳に当たる部分である。

「Blutbeschuldigung」は、直訳すれば「血の非難」「血の告発」「血の誹謗中傷」となるのだが、問題は「血の」がどんな意味を持つかである。大槻訳は「血の」を無視している。丸井訳は「血の」を「厳しい」の意に解している。浜川訳と池見・高橋訳は共に「血の」を「ユダヤ人の血が汚れている」という線で解釈している。Blutbeschuldigung の直前の連想であるトレントのシモンはキリスト教の殉教者・聖人であり、Blutbeschuldigung の直後の連想であるクラインパウルのにおいてもキリスト教徒の犠牲が話題になっている。Blutbeschuldigung の前後の連想で流されている血はキリスト教徒の血である。Blutbeschuldigung の血は、浜川訳、池見・高橋訳におけるように、「ユダヤ人の血が汚れている」ことを目しているのだからか。

トレントのシモンの聖遺物 Blutbeschuldigung クラインパウルの連想の連鎖の箇所を再度拙訳で掲げてみよう

「思い出すのは「…」トレントのシモン、のことです。その聖遺物を二年前にトレントの教会で見ることがあるのです。思い出すのは、ちょうど今またしてもユダヤ人に対して唱えられている誹謗中傷 「ユダヤ人がキリスト教徒を血祭りに上げるといふ」流血の廉での誹謗中傷 (Blutbeschuldigung) のことであり、また、クラインパウ (Kleinpaul) の著作のことです。クラインパウは、このようなキリスト教徒の犠牲と称されるものはすべて救世主の顕現、いわば救世主の新しいあり方であると見ています。」

ユダヤ青年が、「Blutbeschuldigung」という語を使って最近の反ユダヤ主義に触れているのは、単に、先に述べた、ドレフウス事件やルエガーのウィーン市長就任に象徴される政治的反ユダヤ主義の高まりのことを指しているだけではない。当時の政治的反ユダヤ主義の高まりの底流には、根深い宗教的反ユダヤ主義が流れていた。

一四七五年のトレント 過激な反ユダヤ主義者のフランシスコ会修道士ベルンハルディン・ダ・フェルトウレ Bernhadin da Feltré がトレントの修道院長に着任してから、キリスト教徒とユダヤ人がそれなりに融和して生活していた町の雰囲気は一変した。一四七五年五月二三日、復活祭の前日の聖木曜日に、ある職人の息子、三歳（一説には二歳）のシモンが行方不明になった。教区司教はキリスト教徒の敵の仕

業である、と宣言し、ユダヤ人の家の搜索が開始された。三日後、ユダヤ人サムエルが自分の家の前の小川で、シモンの死体を発見した。サムエルを含む七人のユダヤ人が拷問され、犯行を自白した。ローマ教皇の委員会が法的な手続きの正当性を公認したが、他方で、ローマ教皇はユダヤ人迫害を禁止した。しかし、既に一四人のユダヤ人が処刑されていた。シモンの遺体は防腐処理され、聖人の列に加えられた。こうして、トレントのシモンの聖遺物がトレントの教会に存在することになったのである。

ユダヤ人は何の目的でシモンを殺したとされたのか。その答が「儀式殺人」(Ritualmord)である。異教徒の血をペサツハ(過越祭)の儀式に用いるために異教徒を殺すという嫌疑(流血の廉での誹謗中傷 Blutbeschuldigung)は、最初、紀元後一世紀に小ブリニウス(六一一年頃 一三三年頃)等によってキリスト教徒に対してかけられたものだと言われている。この嫌疑がローマ帝国におけるキリスト教徒迫害につながっていったが、キリスト教がローマ帝国の国教になるに及んで、この迫害は終わった。二世紀に至って、「儀式殺人」の廉での誹謗中傷、流血の廉での誹謗中傷がキリスト教徒によってユダヤ人へ向けられるようになった。

そもそも、キリスト教徒、あるいは、ユダヤ人に対する「儀式殺人」の嫌疑はどこから来るのか。直接には、ユダヤ教キリスト教に共通の聖典である『旧約聖書』から来ている。『旧約聖書』のモーセ五書(ユダヤ教のトーラー)において、ヤーヴェ神はモーセに、地上のすべてのものはヤーヴェ神に

属しており、ヤーヴェ神に捧げられねばならない、と告げる。ヤーヴェ神に捧げられるべきものには、人間の初子（長男）も含まれている

主はモーセに仰せになった。「すべての初子を聖別してわたしにささげよ。イスラエルの人々の間で初めに胎を開くものはすべて、人であれ家畜であれ、わたしのものである。」（『出エジプト記』一三：一―二）

あなたの初子のうち、男の子の場合はすべて、贖わねばならない。（『出エジプト記』一三：一―三）

このようなヤーヴェ神の言葉は、一見、初子を人身御供として捧げるべし、という命令のように思えるのだが、実はそうではない

自分の子を一人たりとも火の中を通してモレク神にささげ、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。（『レビ記』一八：二―一）

古代セム人の間には、モレク神（モロク神）に人身御供を捧げるといふ習慣があったようなのだが、ヤーヴェ神はそのような古い習慣を禁止しているのである。ユダヤ教の場合、ヤーヴェ神の命令「あなたの初子のうち、男の子の場合はすべて、贖わねばならない」の「贖う」は、初めは「動物を犠牲に捧げて贖う」ことであり、後には「金銭で贖う」の意

となったのである。

とはいえ、モーセ五書では、動物を神に捧げる儀式の際に動物の血を神の祭壇に注ぎかける様が繰り返し描写されている。特にユダヤ教においては、動物の血を食ってはならないとするトーラーの掟が、律法の集成たるハラハー（道）として事細かに規定され、動物の肉を清浄（カシエル）にするために動物の血を完全に抜かねばならない等、屠殺の仕方の細部にまで及んでいる。

「人であれ家畜であれ、わたしのものである」というヤーヴェ神の言葉、動物の血を神に捧げる儀式、事細かな屠殺の仕方の規定、これらのイメージの相乗効果で、ユダヤ人が「儀式殺人」を行うという嫌疑が増幅していったのだらう。この「儀式殺人」のイメージに決定的なりアリテイを付与したのが、ユダヤ人の割



ケニヨン大学所蔵の「トレントのシモン」の木版画

礼である。生後八日目に幼児に施される割礼は、大人が子どもを流すという恐ろしいイメージを喚起した（ケニヨン大学所蔵の「トレントのシモン」の木版画は、明らかに割礼のイメージから生まれて

いる。⁽⁴⁾

こうして、ユダヤ人は人間の血を神に捧げるために異教徒（キリスト教徒）を殺すという風説が生まれ、一二世紀以降、ヨーロッパに広まっていった。ユダヤ人が過越祭の儀式で食べる種なしパン（マツア）をキリスト教徒の血に浸すという風評も流布した。ローマ教皇等が一貫してこれらの風説を否定したにもかかわらず、一二世紀から一六世紀にかけて、「儀式殺人」の廉でのユダヤ人虐殺が繰り返し起き、その一つがトレントのシモンの事件なのである。

一九世紀半ばから、「儀式殺人」の廉でのユダヤ人への誹謗中傷が反ユダヤ主義者によって再び始められた。その誹謗中傷の中心にいたのが、プラハ大学教授を務めたこともあるキリスト教神学者アウグスト・ローリング August Rohing（一八三九—一九三一）だった。ローリングはその著作『タルムードのユダヤ人』（一八七二）で、『旧約聖書』についての律法的議論の集大成である『タルムード』を歪曲して解釈し、「儀式殺人」の廉でのユダヤ人への誹謗中傷を根拠づけた。一八七〇年代から二〇世紀の初頭にかけてのドイツ語圏で、ローリングのユダヤ人への誹謗中傷をめぐる論争が、ユダヤ教のラビやキリスト教神学者たちを巻き込み、法廷闘争をも含めて延々と繰り返されてきた。先述のように、『旧約聖書』でモレク神への人身御供が禁止されているのだから、論争はローリングの側の劣勢に終始したが、それにもかかわらず、ローリングの主張する「儀式殺人」の廉でのユダヤ人への誹

謗中傷が一般に広まっていった（当時のウィーン市長ルイーガーもローリングへの賛同者だった）。

一八八二年、ハンガリーで、一四歳のキリスト教徒の少女が行方不明になり、殺害犯として一三歳のユダヤ少年が逮捕される事件があった。三ヶ月にわたって拘束され尋問された少年は遂に、シナゴークでその少女に対してユダヤ人たちが儀式殺人を行う様を目撃したと証言した。フランスのユダヤ人内科医イポリート・ベルネーム Hippolyte Bernheim（一八四〇—一九一九）は、この事件でなぜ少年がそのような証言をしたのかに疑念を抱き、一八八六年の著書で、検察官による暗示に因るという説を展開した。まさしくベルネームの当の著書をフロイトは一八八八年、『暗示とその治療作用』という表題でドイツ語に翻訳した。この一事をもつてしても、フロイトが「儀式殺人」の廉でのユダヤ人への誹謗中傷のことを熟知していたことが分かる。

一八九九年にユダヤ青年がフロイトに「思い出すのは、ちょうど今までもユダヤ人に対して唱えられている誹謗中傷」「ユダヤ人がキリスト教徒を血祭りに上げるといふ」流血の廉での誹謗中傷（Bluteschuldigung）のことであり」と語ったのは、そのような時代状況のことを目している。トレントのシモンの聖遺物は、そのような「ユダヤ人がキリスト教徒を血祭りに上げるといふ」流血の廉での誹謗中傷」によって二重に血塗られた遺物、キリスト教徒（シモン）の血が流されたとされ、実際にユダヤ人の血が流された遺物だったのである（その後一九六五年に至ってようやく、ローマ教

皇の委員会がトレントのシモンの聖人としての認定を取り消し、当時トレントのユダヤ人たちに対して誤判が行われたことを認めた。したがって、トレントのシモンの連想と Blutschuldigung の連想は直結しているのである。ユダヤ青年の次の連想はクラインパウルに関するものだった。

思い出すのは「…」また、クラインパウル (Kleinpaul) の著作のことで、クラインパウルは、このようなキリスト教徒の犠牲と称されるものはすべて救世主の顕現、いわば救世主の新しいあり方であると見えています。

ルードルフ・クラインパウル Rudolf Kleinpaul (一八四五—一九一八) は主として地中海沿岸を対象にした歴史家であり、多くの著作があるが、『人身御供と儀式殺人』(一八九二年) という著作の中で、キリスト教徒の犠牲を「救世主の顕現、いわば救世主の新しいあり方」として称揚しているというわけである。もともと、この青年の言い方だから判断すれば、いかにもクラインパウルが反ユダヤ主義者だったように思えるが、サンダー・L・ジルマンによれば、クラインパウルの書はむしろ「キリスト教側からユダヤ人を擁護しようとするもの一つ」だという。「クラインパウルは単に、流血の廉での誹謗中傷と、キリスト教のミサ聖祭奉行との間にある類似性を議論しただけではなく、更に注意深く、『古代セム人のメレク神』に捧げられた人身御供と想定された儀式に

割礼という儀式が取って替わった経緯を検討した⁶⁾。フロイト自身も一八九七年のフリース宛書簡で、性倒錯に関連してだが、古代セム人の「メレク神」に触れたことがあった。

こうして、トレントのシモンの聖遺物、流血の廉での誹謗中傷、クラインパウルという一連の連想はすべて、「儀式殺人」のためにキリスト教徒を殺すという廉でのユダヤ人迫害をめぐめるものであり、それ故、青年がフロイトに話していたユダヤ人圧迫に通じるものである。

三、血の奇蹟

トレントの聖シモンから継起してきたキリスト教をめぐる想念が、キリスト教の聖人たちの名前を喚び出していく

「…」更に思い出すのは、あるイタリアの新聞に載った記事のことで、その記事を最近読んだのです。その記事には、聖アウグスティヌス Augustinus [三五四—四三〇] が女性について言っていること、のような表題がついていたと思います。[…]

「…」立派なお年寄りのことを思い出したのです。先週、旅行中にお会いした方です。本当の変わり者 (Original) で、大型の猛禽のような姿の方です。もしお知りになりたければ、その方の名前はベネディクト (Benedikt) です。」

少なくとも、聖人や神父たちの名前が並んだことにはなりませんね。聖シモン「一四七五年没」、聖アウグスティヌス、聖ベネディクトゥス (Benediktus) [四八〇頃—五四三] とい

うわけですよ。オリギネス（Origines）という名前の教父「正確にはオリゲネスOrigenes（一八五頃 一五三）もいたと思っんですが。[...]」

「ああ、聖ヤヌアリウス、Januarius [= 聖ジェンナロ San Gennaro（三〇五年没）]と彼の血の奇蹟のことを思い出ししました。まるで自動的に続いていくようですね。」

「[...] 聖ヤヌアリウスと聖アウグスティヌスはどちらも暦と関係がありますね。[...]」

次々とキリスト教の聖人・教父たちが喚び出されてくる中に聖アウグスティヌスと聖ヤヌアリウスの名前が含まれていることから、フロイトは、この二人の聖人の名前が「Januar（一月）、August（八月）」という月の名前とつながっていることに気づく。こうして、暦が喚び出されたことになる。

青年は聖ヤヌアリウスの血の奇蹟を詳しく描写する

「[...] ナボリの教会で、ガラス瓶の中に聖ヤヌアリウスの血が保存されています。この血が特定の祝祭日に奇蹟によってまた液状（flüssig）になるのです。民衆はこの奇蹟のことをとても大切にされていて、その奇蹟の起きるのが遅れるとパニックに陥るんです。実際、昔フランス軍に占領されていた頃、そういうことがあったのです。すると司令官が、あるいは、それは勘違いで、ガリバルディだったのかもしれないが、それは神父を脇へ呼び、戸外に配置された兵士たちを非常に露

骨な身振りで指し示しながら、その神父に分からせようとなりました。奇蹟がすぐさま起きることを自分は希望する（hoffe）と、ね。すると、実際に、奇蹟は起きたのでした...」

いざさか信じがたい「奇蹟」だが、現在もなお続いている「奇蹟」である。

ナボリに比較的近いベネヴェントの司教だった聖ジェンナロ「[...] 聖ヤヌアリウス」（Gennaro は Januarius のイタリア語形、「一月」もイタリア語では gennaio）は、折からのローマ帝国皇帝ディオクレティアヌスによるキリスト教徒迫害下、三〇五年九月一九日に処刑された。その直後、ある女性が彼の血を小瓶に保存し、三一三年にその血がナボリに運ばれてきた時、「血の奇蹟」が初めて起きたと言われている。聖ジェンナロの血が保存されていた礼拝堂の場所でナボリの大聖堂の建設が始まり、一六四六年以来、聖ジェンナロの血はこの大聖堂に収められている。毎年、五月の第一日曜日（前の土曜日と九月一九日）（聖ヤヌアリウスが殉教した日）に、ナボリの大聖堂では、聖ヤヌアリウスの胸像の前に聖ヤヌアリウスの凝固した血の入ったガラス瓶が据えられる。信者たちが熱狂的に祈りを唱える中、何度もガラス瓶が手に取られ上下逆さまにされて中の血が溶けていないかが確かめられる。こうして突然、ガラス瓶の中の血が液状になるという「奇蹟」が起きる（現代の科学者の見方の主流は、揺変性のゲルが揺さぶられることによってかき混ぜられて液状化する、というものである）。この「血の奇蹟」が起きないと、ナボリ

の町に災難が起きると信じられている。フランス占領軍の司令官が「奇蹟がすぐさま起きることを自分は希望する」という指示を発したのは、民衆の間にそのような信仰があったからである。

こうして、フロイトが青年の次の連想を聞いてすべてを解き明かすための材料が出揃ったことになる

「……」そつき突然ある女性のことを思い出しただんです。その女性からは、私とその女性のどちらにとっても非常に不快なことになりかねない知らせを受け取ることになるかも知れないんです。」

彼女の月経が止まってしまったということですか？

「どうして当てることができたんですか？」

「ここまで来ればもう難しいことではありません。準備のため材料を十分にいただいたんですから。思い出して下さい。曆の聖人たち、特定の日に血が液状になること、予期された出来事が起きない時のパニック、奇蹟は起きなければならぬ、さもなければ……という明白な脅し」と続きました。あなたは結局、聖ヤヌアリウスの奇蹟を使って、その女性の月経のことを見事に暗示なさったんですよ。」

「ここに至ると、すべてが符合してくる。フロイトは司令官の言葉「奇蹟がすぐさま起きる」ことを自分は希望する (hope) の「希望する」(hope)の部分をやや強調していた。後の分析でフロイトは「こゝをならに」の強調について触れることは

ないが、ドイツ語の「希望」(Hoffnung) という語には「希望している」(in der Hoffnung sein) が「妊娠している」という意味になるような用法があることを意識していただろう。

「ヘーネティック」の連想の箇所では「Original」という語が「変わり者」の意で使われていたが、この強調された「Original」と同語源のラテン語「origo」には「生じる、始まる、生まれる」の意があり、この点から、フロイトが密かに「月経が始まる」「子どもが生まれる」のような連想をしていた可能性もある。

こうして、青年が「aliquis」という語を度忘れした際に抑圧されていた(=意識から追い出されていた)想念は「もし女性の月経が始まらなかったら……」という心配事であったことが判明する

「自分で意識しないままに」ということですね。本当にそう思ってしまうんでしょうか。この心配事のために私が aliquis (誰か) という単語を思い出すことができなかった、と。」

疑いの余地はないでしょうね。どうか思い出して下さい。aliquis という二つの部分に分解された「aliquis」 Reliquien (聖遺物) Liquidation (液状化) Flüssigkeit (液体) という連想のこと。更に、あなたが聖遺物から思いつかれた、子ども、の時に犠牲にされた聖シモンと関連づけてもいいのですがね……

青年は反ユダヤ主義の高まりに対して復讐したいという気持ちを抱き、その気持ちを『アイネイス』の中の女王ディードーの復讐の誓いを引用することによって代弁させようとした。ディードーの復讐の誓いは、「子孫」に復讐を託せよとするものであった。「aliquis」という語が意識へ浮上しようとした瞬間、「liqui」という部分が無意識裡に「もし女性の月経（血の液状化）が始まらなかつたら自分の子孫（血筋）が生まれてしまふ」という想念と結びついた。この想念が、「子孫」に復讐を託せよとするディードーの言葉と矛盾撞着に陥った。月経（血の液状化）と子孫（血筋）という想念に絡みつかれた「aliquis」という語は、意識に浮上しようとした刹那、再び抑圧され（＝意識から追い出され）、無意識に引き戻された。

ここで決定的な役割を果たしているのが、何よりも、液体としての「血」である。フロイトに促されて青年が最初に思い出したのが、*a et liquis* という二つの部分への分解、*Reliquien*（聖遺物） *Liquidation*（液状化） *Flüssigkeit*（液体） *Fluid*（液体の）、*トレントのシモンの聖遺物* という連鎖であった。これらの連想にはすべて、「血」＝液体のイメージが絡みついていてた。

初版に付された註で、分析の終了後、フロイトが青年に「aliquis」を度弁れた際に何か代わりに思いついたことがなかったかを尋ねたところ、青年は先ず「nostris ex ossibus」の代わりに「nostris ab ossibus」と言いたい誘惑を感じたと述べる。ラテン語の「ex」も「ab」も日本語では「から

と訳せるが、両者には「ex」がドイツ語の「aus」、英語の「out of」に当たる前置詞であり、「中から外へ」という意味合いが強いのに対して、「ab」はドイツ語の「von」、英語の「from」に近い前置詞であり、「起点」というニュアンスが強いという違いがある。「中から外へ」という意味の「ex」が排除されようとしたということは、胎児が「中から外へ」現れ出でる（exorior）というイメージが排除されようとしたということにつながるかも知れない。

フロイトは、口に出されようとした「ab」は「a-liquis」の切り離された断片ではないかと推測している。ラテン語の「ab」は実際に「a」の形になることもある。「ab」はドイツ語では、動詞の前に付いて「離脱、除去、終結」等の意味を表す。「否定」の意味合いを帯びている（例えば「leben 生きる」「ableben 死ぬ」）。「ab」はまた、名詞・形容詞の前に付いて「否定、反対」を表す（例えば、「Norm 規範」「abnorm 変則的」）。「a-liquis」から切断された「a」は、ギリシア語では「否定」の意を表し、この意味のギリシア語の「a」がドイツ語等の「a」に引き継がれている（例えば「Moral 道徳」「Amoral 不道徳」）。ラテン語の「aliquis」は本来「ali」（或る別の）＋「quis」（誰か）という形で成り立っているが、それが「a-liquis」という切り方をされたのは、「a」（否定）＋「liqui」（液体）というイメージを生じさせるためであったと思われるのである。

初版の註で、分析の終了後、更に青年から「Exoriaré」（現れ出でますように）という語が特に執拗に頭に思い浮かんだ

ことを聞いたフロイトは、「Exoriare」という語から連想する語を尋ねる。青年の答は、「Exorzismus」（悪魔払い）という語である。「悪魔払い」という連想の根底には、悪魔と同一視されたユダヤ人をキリスト教の聖人たちが追い払う、という観念が潜んでいるかもしれない。実際、聖シモン、聖アウグスティヌス、聖ベネディクトゥス、オリゲネス、聖ヤヌアリウスと、「悪魔払い」を行う力があると思われるキリスト教の聖人、神父たちが次々に喚び出されていた。初版の註では、フロイトは、「Exoriare」（現れ出しますように）という語の特別な強度が、代理形成の価値を有していたことを指摘し、更に「代理形成」「度忘れした」「aliqnis」の代理として念頭に浮かぶ表象」が「Exorzismus」（悪魔払い）を経由して聖人たちの名前から生じていたかもしれない」と述べるが、それ以上の分析はしようとしなない。フロイトは、一九二四年の第一〇版で、この箇所の註を増補し、P・ウィルソンの「exoriareの特別な強度には、事情を解き明かす高い価値がある」というのも、生まれるのを恐れている子どもを墮胎（Abortus）によって取り除くという想念が抑圧されている「＝意識から追い出されている」ことを「Exorzismus」（悪魔払い）が最も適切な形で象徴的に代理しているであろうからである」という見解に賛意を表している。

先の引用にあったフロイトの言葉「更に、あなたが聖遺物から思いつかれた、子どもの時に犠牲にされた、聖シモンと関連つけてもいいのですがね……」の中の「子どもの時に犠牲にされた」という言い方が、まさしくウィルソンが指摘した

「墮胎（Abortus）」を想起させる。トレントのシモンの場合には、「子どもの時に」「一・三歳の子どもの時に」犠牲にされた」とされていたのであり、「墮胎」の場合は、「子どもの時に」「胎児の時に」犠牲にされた」ということになる（今挙げた名前の中の三つは、クライン・パウロという名前の中のパウロと同じように、どれも洗礼名ですね」というフロイトの指摘の背後にも、妊娠・出産となれば洗礼名をつけなければならなくなる、という想念が潜んでいたのではないか）。「Abortus」（現代では普通「Abort」）という語に、先ほど指摘した「ab」が付いており、「Abortus」という語自体に「立ち去る、流れ出る」という「否定」が含まれている。ジルマンは、ユダヤ青年が妊娠したかもしれないと心配している相手の女性がイタリア女性であることから、イタリア女性（キリスト教徒＝異教徒）との間に生まれた子供は殺されねばならないのだ、という旨の指摘をしている。

この第二章については、ピーター・J・スウェイルズの「フロイト、ミンナ・ヘルナイス、及び、ローマの征服」（一九八二）という論文がよく引き合いに出される。残念ながら今回は直接にこの論文を参照することはできなかったが、ピーター・L・ラドニツキーの「スウェイルズへのインタビュー」やポール・フェリスの「フロイト伝等を見ると、スウェイルズが、この第二章に登場するユダヤ青年はフロイト自身であり、ユダヤ青年が妊娠を心配している相手の女性はフロイトの妻マルタの妹ミンナである」という推理を展開していることが分かる（未婚のミンナは一八九六年以来、フロイト

家に同居していた)。本稿はこのような点を闡明しようとするものではないが、簡単に当時のフロイトの状況を追っておきたい。

フロイトが『日常生活の精神病理学』の本格的な執筆を始めたのは、一九〇〇年の九月と思われる。七月末から八月初め、フリースとの訣別となる出会いを経て、フロイトは妻のマルタとその妹ミンナと共にイタリア旅行に出た。一週間後にマルタはウィーンに帰っていった。八月二六日に、フロイトはミンナと共にトレントへ赴き、二週間にわたって北イタリアを旅行した後、ミンナをティロル地方の保養地メラノへ送り届けた。持病の「肺炎カタル」のぶりがえしたミンナは保養のためにメラノに六週間滞在した。九月一〇日頃にウィーンに帰着したフロイトは、『日常生活の精神病理学』を書き始めた。スウェイルズは、ミンナのメラノ滞りを「墮胎」のためと主張するのである。「もし女性の月経が始まらなかったら……」というユダヤ青年の心配は、実は、旅行中に性関係を持ったミンナの月経が始まらないというフロイト自身の心配だった。フロイトは、ユダヤ青年という架空の人物の登場するフィクションによって自分自身の記憶を隠蔽している、というわけである。ヒーター・ゲイは、留保つきながら、スウェイルズの推理を疑問視した。ゲイが留保をつけざるを得なかったのは、フロイトとミンナの間の往復書簡等の資料が未公開であるという事情に起因していたが、現在もその事情には変わりがないようだ。フリースによれば、フロイトとミンナとの関係に関する噂は様々に流布していたようだが、

真偽の程は定かではない。
むしろ、次のようなフリースの見解が当を得ているように思われる

しかし、フロイトが妊娠のことを心配していたという事実は、ミンナとは何の関係もないかもしれない。当時三九歳の妻マルタこそ、自分の月経が始まらないのに気づいた当の人であった可能性がある。フロイトがウィーンに戻ってきた時、そのことを知らされたとすれば、それは恐らく、「aliquis」をめぐる一連の連想を始動させるのに十分な条件となったであろう。¹⁵⁾

つまり、フリースは、スウェイルズのミンナ妊娠説をやんわりと退けつつ、しかし、月経が始まらないという心配は、妻マルタについてのフロイト自身の心配だったという立場を取っているのである。これは蓋然性の高そうな見方だと思われる。というのは、フロイトとマルタとの間には、一八八七年に長女マティルデ、一八八九年に長男マルティン、一八九一年に次男オリヴァー、一八九二年に三男エルンスト、一八九三年に次女ゾフィー、一八九五年に三女アンナと、次々に子どもが生まれており、一九〇〇年の夏のイタリア旅行からウィーンに帰ってきて『日常生活の精神病理学』の執筆を始める半年前の三月一日付けのフリース宛書簡に、「……私の子作りは終了しており……」¹⁶⁾のような文面が見られるからである。ウィーンに帰ってきて妻マルタから月経が遅れて

いることを知らされたフロイトが、「aliquis」を一瞬思い出せないことがあり、自己分析としての連想実験を始めた、という可能性があるのではないか。その場合、架空のユダヤ青年を登場させたのは、隠蔽記憶というより、自己韜晦と言つべきだろう。

すると、この第二章に登場するユダヤ青年は、スウェイルズの主張通り、架空の人物であることを認めることになる。周知の通り、フロイトはキリスト教世界のユダヤ人として様々な葛藤を抱え込んでいた。ユダヤ人からチャンスが奪われつつあるという慨嘆は、フロイト自身のものであり、先に述べた通り、フロイト自身が、反ユダヤ主義者カール・ルエーガーの動向を注視し、「ユダヤ人がキリスト教徒を血祭りに上げるといつ」流血の廉での誹謗中傷 (Blutbeschuldigung) のことを熟知していた。

青年の連想に「……立派なお年寄りのことを思い出したのです。先週、旅行中にお会いした方です。本当の変わり者 (Original) で、大型の猛禽のような姿の方です。もしお知りになりたければ、その方の名前はベーネディクト (Benedikt) です。」という部分があった。このベーネディクトが誰であったのかは不明だが、フロイトのヒステリー研究の先駆者の一人に、神経学等の幅広い研究をしたモーリッツ・ベーネディクト Moriz Benedikt (一八三五—一九二〇) がいた。ウィーンにはまた、もう一人、同姓同名の有名人がいた。当時のウィーンのリベラルな新聞「ノイエ・フライエ・ブレッツェ」の共同編集者だったモーリッツ・ベーネディクト Moriz

Benedikt (一八四九—一九二〇) である。一九〇〇年には、前者が六五歳、後者が五一歳であり、「お年寄り」(alt) という形容は前者に相応しいように思えるが、当時は五一歳でも「お年寄り」(alt) と言えたのではないか。残された写真を見ると、後者のモーリッツ・ベーネディクトは魁偉な顔貌をしており、「大型の猛禽のような方です」という描写がより当たっているようにも思える。もちろん、フロイトの記述には洗礼名の「モーリッツ」は現れないのであり、「ベーネディクト」が誰であったのかは特定のしようがないのだが。

第二章の分析経過をフロイトがまとめている部分を訳出してみよう

話者である青年は、彼が属しているユダヤ人の今の世代が自分たちの諸権利を剥奪されつつあることを嘆いた。彼はカルトゴの女王デイドーのように、自分たちを圧迫している連中に対する復讐を次の世代が引き受けてくれるだろう、と予言する。つまり、彼は、子孫への願望を口にしたのだった。この瞬間、矛盾する想念が彼の脳裡に割って入ってきた。「おまえは本当に心から子孫を願っているのか？ そんな願望は真実ではない。もしおまえが今、おまえのご承知の筋から子孫をもつけることになるという知らせを受け取ったら、おまえはどんなに狼狽することだろう？ いやだ、子孫なんか要らない 復讐のためにはどんなに子孫が必要であるとしても。」

「このように密かに萌してきた、子孫をめぐる矛盾・葛藤が「aliquis」の度忘れを惹き起こしたといっているのである。

この矛盾が「…」彼の表象要素の二つ「= aliquis」と、異議を唱えられた願望「= 復讐のための子孫なんか要らない」の「要素」= もし月経（血の液状化）が始まらなかつたら：」との間に外的な連想を作り出すことによつて、この矛盾が力を揮い始める。しかも、この場合、連想のわざとらしく思える回り道を通つてきわめて力ずくのやり方で。

「…」で「外的な連想」と言われているのは、無意識＝「内」、意識＝「外」というレベルでの「外的」ということではない。この「外的な連想」は、「aliquis」が本来「誰か」という内的な意味を担っているにもかかわらず、その内的な意味を無視して「aliquis」から形式的に「liqui」（液体）の部分抽出して「月経（血の液状化）」と結びつくという無意識的・形式的・機械的な作業のことを言っている。

「連想のわざとらしく思える回り道を通つて」と言われている。「…」で抑圧されていた（意識の外へ追い出されていた）想念は「もし月経が始まらなかつたら…」という想念なのだが、「aliquis」の度忘れから「つきあっている女性の月経についての想念に辿り着くまでに、a と liquis という二つの部分への分解、Reliquien（聖遺物） Liquidation（液状化） Flüssigkeit（液体） Fluid（液体の）、Tränntのシモン¹⁷の聖遺物 流血の廉での詐誇中傷（Blutbeschuldigung） クライ

ンパウ（Klempaul）、聖アウグスティヌス、変わり者（Original）ベネディクト（Benedikt）、聖ヤヌアリウス（曆）と彼の血の奇蹟 希望する（hoffe）と「unachtern」延々と長い連想の道を進ってきた。「連想のわざとらしく思える回り道を通つて」と言われるのは、無意識裡の「月経」を起点にして無意識的な外的・形式的・機械的連想がこの長い道を逆に辿つて「aliquis」の度忘れを生起させた、とフロイトが想定しているといっているのである。

最後に、フロイトは、この度忘れの際に働いたメカニズムを次のように定式化する

「…」ある想念が、抑圧された「意識の外へ追い出された」ものに発する内的な矛盾によつて妨害されること「…」

この定式に「aliquis」のケースを具体的に当てはめると次のようになるだろう

ある想念（＝「aliquis」という想念）が、抑圧された「意識の外へ追い出された」もの「＝性交渉…もし月経（血の液状化）が始まらなかつたら…墮胎…」という心配事」に発する内的な矛盾「＝子孫によつて復讐してほしい、だが、いやだ、子孫なんか要らない」という内的矛盾」によつて妨害されること

ゲルハルト・マッケントウーンが指摘しているように¹⁷

「性交渉…もし月経（血の液状化）が始まらなかつたら…墮胎…」のよつな心配事は、青年の脳裡に絶えずつきまとい、青年の意識を領する事柄であつたはずだ。しかし、例えば、社会的な会話とか仕事をしている際には、そのような心配事は一時的に抑圧されている「意識の外へ追い出されている」ものでなければ、まともな会話や仕事を続けることができな

だらう。

青年は、ユダヤ人を圧迫する時代状況に悲憤慷慨しつつ、デイドーの、子孫による復讐への願望の言葉を引用しちうとつて「aliquis」を思い出すができない。意識に浮上つておつた「aliquis」の「liqui」（液体）の部分が、一時的に抑圧されていた「意識の外へ追い出されていた」想念「性交渉…もし月経（血の液状化）が始まらなかつたら…墮胎…」という想念を無意識裡に刺激し、意識レベルで話していた「子孫による復讐」という想念と、無意識でつづめき始めた「いやだ、子孫なんか要らなう」という想念との間に「内的矛盾」が生じる。この内的矛盾が「liqui」（液体）に取つてお「aliquis」もひそかに無意識の中へおちこちひびきこまへ。この「aliquis」の度外れが生起する（ユダヤ人の「無意識」は「前意識」のレベルだらう）。

青年が唱へておつた「Exoriat(e) aliquis nostris ex ossibus ultor」の「用ひ」が「aliquis」（液体）「Reliquien（聖體物） Liquidation（液状化） Flüssigkeit（液体） Fluid（液体の）」 「ex」 「内から外へ」 出題「ex」 「ab」 離脱、除去、終結 原因 「a」 「原因」 Abortus（墮

胎)「Exoriat(e)」 「Exorismus」（悪魔払い） Abortus（墮胎）」といふうちに「性交渉…もし月経（血の液状化）が始まらなかつたら…墮胎…」という無意識裡の想念を喚び起す要素が蟄集していたのである。「Exoriat aliquis nostris ex ossibus ultor」というヘルキウスのは、当時のインテリにとつてはごく当たり前の教養だつた。そのごく当たり前の言葉にこのよつに無意識裡の想念を掻き立てる要素の蟄集を生じたのは、ユダヤ青年の（あるいは、フロイトの）ユダヤ人迫害への憂慮の深さや、つきあつてゐる女性が（あるいは、妻が）妊娠したのではないかという不安の強さであつた、と言つことができる。無意識に滞留した情動は、かくも執拗にテキストに取りつき、かくも強引にテキストを変貌させるのである。

註

(1) Freud, Sigmund : *Zur Psychopathologie des Alltagslebens. Über Vergessen, Versprechen, Vergeffen und Irrtum*, Berlin 1904.

(2) Freud, Sigmund : *Zur Psychopathologie des Alltagslebens. Über Vergessen, Versprechen, Vergeffen und Irrtum*, Fischer Taschenbuch 2000.

(3) 以下のユダヤ人の風習や反ユダヤ主義に関する記述は、以下の資料に基づいてゐる。

Jüdisches Lexikon, begründet v. Georg Herlitz u. Bruno

- Kirschner, Berlin 1927.-Königsstein/Ts. 1982.
Kleines Lexikon des Judentums, hrsg. v. Johann Maier u. Peter Schäfer, Konstanz 1981.
- Der Talmud*, übersetzt v. Reinhold Mayer, München 1980
- Gilman, Sander L. : *The Case of Sigmund Freud*, Baltimore/London 1993.
- 新井同訳『聖書』日本聖書協会 一九八九年。
- フロン・ウンターマン(石川耕一郎・市川裕訳)『ユダヤ人』筑摩書房 一九八三年。
- <http://www.lgd.de/projekt/judentum/2-3.htm>
- (4) <http://www2.kenyon.edu/projects/margin/simexp.htm>
- (5) Gilman, S.209f.
- (6) Gilman, S.211.
- (7) Freud, Sigmund : *Briefe an Wilhelm Fliess* , hrsg. v. Jeffrey M. Masson u. Michael Schröter, Frankfurt a. M. 1999, S.240.
- (8) 以下の語ヤヌアリウスに関する記述は、主に次の資料に掲載されている
- [http://www.portanapoli.com/Neapel/Kultur/body_kut-blutwunder.html](http://www.portanapoli.com/Neapel/Kultur/body_kut_blutwunder.html)
- http://www.cicap.org/en_artic/at101014.htm
- (9) ドイツ語の接頭辞については、主に『独和大辞典第二版』(小学館)を参照。
- (10) Gilman, S.211.
- (11) Swales, Peter : *Freud, Minna Bernays, and the Conquest of Rome*, in : *The New American Review* 1982.
- (12) Rudnytsky, Peter L. : *Psychoanalytic Conversations*, Hillsdale/London 2000.
- (13) Ferris, Paul : *Dr. Freud, A Life*, Washington 1999.
- (14) Gay, Peter : *Freud, A Life for Our Time, 1988-1998* New York / London, S. 752f.
- (15) Ferris, S.180.
- (16) Freud : *Briefe an Wilhelm Fliess* , S.443 ; Vgl. Ferris, S.176.
- (17) Mackenhuun, Gerald: <http://ppfi.de/BUCHBESP/reve.htm>